

## 祈ることの大切さ

2006. 9. 13

春日部集會にて  
ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

ルカの福音書 11章1節から13節

さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちを試みに会わせないでください。』」また、イエスはこう言われた。「あなたがたのうち、だれかに友だちがいるとして、真夜中にその人のところに行き、『君。パンを三つ貸してくれ。友人が旅の途中、私のうちへ来たのだが、出してやるものがないのだ。』』と申したとします。すると、彼は家の中からこう答えます。『めんどろをかけたでくれ。もう戸締まりもしてしまつたし、子どもたちも私も寝ている。起きて、何かをやることはできない。』あなたがたに言いますが、彼は友だちだからということで起きて何かを与えることはしないにしても、あくまで頼み続けるなら、そのためには起き上がって、必要な物を与えるでしょう。わたしは、あなたがたに言います。求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであっても、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるのでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さないことがありますでしょう。」

私が何十年か前に卒業したスイスの神学校の中には、印刷会社もありました。神学のために必要なものを印刷するようになったのです。その会社の名前はちょっと変わった名前です。「大いなる喜び」。ドイツ語で「Grosse Freude」(グローセ フロイデ) という名前です。そして、毎月印刷された小冊子は『聖書と祈り』という題名だったのです。「聖書」だけではなく、「聖書と祈り」です。

聖書は、つまり祈りの材料として与えられています。勉強するためよりも、祈りの材料とならなくてはなりません。即ち、一方通行だけではなく、どんなに聖書を勉強しても、祈りがなければ心は満たされないのです。主は聖書を通して、ちっぽけな人間に対して語ろうと望んでおられます。そして祈ることによって人間が応えるのです。

今晚は「祈ることの大切さ」についていっしょに考えてみたいと思います。

五つの事がらについて。

まず、「祈りの難しさ」については、だれでも考えたことがあると思います。祈りは、ある意味で非常に難しいことです。福音を宣べ伝えること、人を誘うことはそんなに難しくありませんが、一旦祈るとなると、戦いが始まるのです。そればかりではなく、祈りによって勝利を得ることは何と難しいことでしょうか。多くの人は、祈るけれど途中でやめてしまいます。つまり諦めてしまいます。どうせダメではないかと。ですから、祈り続けることは戦いの連続となるのです。

二番目。私たちは、もっともっと「祈りの特権」ということを、深く知らなくてはならないでしょう。天にいます主の御前に出るということは、何というすばらしい特権でしょうか。例えば、イスラム教徒は、毎日五回、七回とひれ伏して拝まなくてはなりません。けれども、彼らの拝んでいる神は永久的に近づき得ない、知ることができない神であるのです。これは悲劇的ではないでしょうか。しかし、私たちはすごい特権を持っています。天と地を創造されたお方に向かって、私たちは、「お父様！」と呼ぶことができるのです。祈りは本当に大きな特権です。絶えず覚えるべきことではないでしょうか。

三番目に、私たちは心のうちに祈りは大切だということを当然知っているのです。私たちの、天とのつながりは非常に大切です。私たちのできる奉仕のうちで一番大切な奉仕は「祈りの奉仕」である、と聖書は語っているのです。主イエス様のために、また教会のためにもっとも大切なことは、祈ることです。

四番目に、私たちは既に、祈りのうちにそれを妨げるものがあるということは何回も何回も経験したでしょう。悪魔は、私たちが何があっても祈らないようにと、あらゆる試みを仕掛けてきます。このことは、祈りがいかに大切であるかということを示しているのではないのでしょうか。悪魔は大切でないものをひどく攻撃するはずはありません。私たちが聖書を読んだり、勉強をしたり、いろいろな人のために努力したりすることは、悪魔はそんなに攻撃しません。けれども祈ろうと思えば大変です。なぜなら、祈ると悪魔はどうすることもできなくなってしまうからです。

五番目に、祈りは私たちの霊的生活の鏡のようなものです。祈らない人は成長しません。例えば、集会に何人来るかは別にどうでもよいことです。決して大切ではありません。私たちがいかに主のみこころにかなった祈り人であるかということこそが、大切なのです。

祈りの土台なるものとは、いったい何でしょうか。

まず、私たちの祈る対象とは、この宇宙を創造されたお方です。森羅万象を無限に支配しておられるお方です。この方にとって不可能なことは一つもありません。

この宇宙を支配する掟をさらに支配する掟が祈りである、と聖書は語っているのです。

多くの人は、私たちの祈りは主のみこころに影響を及ぼし得ないと考えています。祈りは恒久不変の宇宙現象を絶対に覆し得ないと言います。けれど、そうでしょうか。

聖書を読むと違います。ヨシュアは、祈りによって、太陽を一日二十四時間沈まないままにしておいたと聖書は記しているのです。学者たちはいろいろなことで、どういうふう

に研究したか分かりませんが、ヨシュア記 10 章 12 節から 14 節に記されているように、やはり一日無いと言うのです。どうしてか、なぜか分かりません。聖書ははっきり答えています。ヨシュア記の 10 章を読むと、次のように書かれています。

ヨシュア記 10 章の 12 節から 14 節まで  
主がエモリ人をイスラエル人の前に渡したその日、ヨシュアは主に語り、イスラエルの見ている前で言った。「日よ。ギブオンの上で動くな。月よ。アヤロンの谷で。」民がその敵に復讐するまで、日は動かず、月はとどまった。これは、ヤシャルの書に

しるされているのではないか。こうして、日は天のまなかにとどまって、まる一日ほど出て来ることを急がなかった。主が人の声を聞き入れたこのような日は、先にもあとにもなかった。主がイスラエルのために戦ったからである。

これによって分かることは、宇宙を支配する掟を、さらに支配する掟があるということです。この上の掟を動かすのが、結局祈りなのです。

これをもっと分かりやすくするために、もう一つの例を挙げてみましょう。ニュートンという学者が発見した万有引力の法則は、定まった一つの掟です。この引力があるので、人間は空中高く一人で舞い上がることができないのであり、また、鉛筆や万年筆を落とした場合、それらが空中にとどまったり、また、はるかに大空に飛んでいってしまうというようなことがないのです。けれど飛行機はこの引力を克服して空を飛びます。引力は相変わらず、常に存在しています。けれど、その飛ぶ法則が引力に打ち勝っているために、飛行機は大空を飛んでいるわけです。

祈りも同じことです。主はお一人では働こうとなさいません。どうしてか、なぜか分かりません。けれど聖書ははっきり記しているのです。主は祈りの人とともに働こうと望んでおられます。

この事実を、聖書や教会の歴史で学ぶとき私たちは、はっきり分かります。例えばダニエルは、このような祈りの人だったのです。そのとき、主の民であるイスラエル人は捕われの身であり、悪魔が勝利を得ておりました。けれど、ダニエルは主のみこころを知っていましたから、熱心に主に祈り、結果として奇蹟を経験することができました。

主のみこころにかなった祈りは、実に奇蹟をもたらす力です。主のみこころにかなった祈りに不可能なことはないといエス様は何回も何回も約束してくださったのです。まことの祈りは、この地上における実り多き働きです。

私たちが祈りのうちに主と交わることは、主のみこころです。ですから、私たちはこの祈りの特権、祈りの責任を十分に自覚し、今の世の中であって、ひたすら祈ろうではありませんか。

祈ることこそ、もっとも大切なことです。どうしてでしょうか。

祈りとは、主ご自身との交わりであるからです。信仰生活の秘訣は、イエス様と一つになることです。また、祈りの秘訣でもあります。私たちは、イエス様との交わりによって天のお父様に近づかせられた者です。この事実を深く考えてみたいものです。

コリント第一の手紙の中で、一文章なのですが、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第一 6章17節

**主と交われば、一つ霊となる。**

また、ヨハネ第一の手紙の1章3節。よく知られているすばらしい個所です。

ヨハネの手紙・第一 1章3節

**私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。**

私たちが主イエス様および天のお父様との交わりにあずかっていることは、すばらしい特権です。

救われた兄弟姉妹とそうでない人々の違いは、どこにあるのでしょうか。

救われていない人は、偶像に祈ります。ですから、それらの神々はどこか遠くに離れており、また、沈みがちですが、イエス様を知るようになった者は、イエス様と一つになることによって、生きる唯一のまことの神との交わりを持っているのです。ここにその違いがあります。

神の敵である悪魔の働きは、実に巧みであって、悪魔は常に私たちに、「おまえたちは神から遠く離れているのだ」とささやくのです。けれど、もし私たちが主イエス様にあるならば、主なる神と私たちの間では、決して決して隔たりはありません。なぜなら、主によって恵みを受けた者として、イエス様のように父なる神のみそば近くにいる者はいらっしやいません。私たちはその御子主イエス様にあるのですから。

祈りは霊的な事からである、ということを知ることが本当に大切です。人の霊は新たに生まれることによって生き返り、聖霊と一つになります。この結び付きからまことの祈りが生まれてきます。多くの人々はこの交わりを持っていないので、祈りの答えが与えられません。おもに聖書のガラテヤ書の中で、何回も触れている事実ですが、肉による祈りには答えがありません。

この肉による祈りとはどのようなことなのでしょう。私たちの意思、私たちの願い、私たちの望み、私たちの考えのような祈りは、結局肉の祈りであり、自分勝手な祈りです。このような祈りは、もちろん主のみこころにかなわない祈りであることは言うまでもありません。

もし私たちがイエス様のうちにとどまり続けるなら、常に霊によって祈ることができ、主の答えは、私たちに常に確実に与えられることです。イエス様ご自身が約束してくださったのです。

ヨハネ伝の15章7節を読むと、次のようにイエス様は当時の弟子たちに言われました。  
ヨハネの福音書 15章7節

あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

祈りの成果の秘訣はイエス様との交わりです。このことをしっかりと記憶に留めておくと、多くの失敗から免れるでしょう。

またこの失敗の一つは、マタイ伝の6章に書かれています。いわゆる山上の垂訓に出てくるみことばなのです。

マタイの福音書 6章7節、8節

また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多いければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたがお願いする先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。

このような祈りは、決して主のみこころにかなった祈りではありませんが、私たちは時々このような祈りを主にささげはしないでしょうか。また私たちは、長い祈り、または熱心に祈るなら、主は必ず聞き届けてくださると考えるのではないのでしょうか。このような錯覚による祈りが、主との親しい交わりの妨げとなってささげられているのが現実ではないのでしょうか。

まことの祈りの秘訣は、主との交わりです。祈りは、主が与えたくないものを求めるのではなく、主が与えたいところのものを祈り求めることが、本当の祈りです。

聖書の中に、イエス様は夜を徹して祈られた、と書いてあります。けれどこの祈りは前から計画されていた祈りではありません。イエス様はただただ祈らずにはいられなかったのです。祈るよりほかに道がなかったと思います。

祈りは自分の努力ではなく、御霊の押し出しです。主との交わりにある人々の祈りは、人間から出た最上の祈りより、はるかに価値のある祈りと言わなくてはなりません。

イエス様との親しい交わりこそ大切です。

当然のことですが、作った祈りはやはり誤りの一つです。私たちはいろいろな事に対し、主の関心と呼び覚ますために祈ります。祈りの重要さは、信じる者みんなが等しく認めていることです。したがって主のための新しい計画がなされると、私たちは熱心に祈ります。けれど、その働きが主のみこころであり、主のなさるわざであるかどうかを知ることを、

時には忘れていないのではないのでしょうか。私たちがささげる祈りすべてが主との心の交わりから出ているものでなければなりません。

主は、私たちの主に対する最上の努力でも、それが人間的な努力であれば、それに対して全然関心をお持ちになりません。主のみこころは、私たちが主の働きに関心を持つことです。もし私たちがこれを知らなければ、私たちが祈る多くの時間は無駄に過ごしたことになります。主ご自身が働きの設計者であり、建設者でなければなりません。主だけが、どのようにしてその働きを成し遂げるかご存じです。ですから私たちにとって大切なことは、主と交わることなのです。

イエス様はよく言われました。「わたしはわたしの教会を建てる」。すばらしい約束です。主のみこころは、そのときも今も変わりがありません。ですから私たちは、主と絶えず一つになっているなければ、空を打つ拳闘になってしまいます。

主との交わりの第一段階は、主の御前に静まることです。ダビデはよく祈ったのです。「私のたましいは黙って、ただ神を待ち望む。私の救いは神から来る。(詩篇62:1)」と祈ったのです。主の前に静まることを私たちが学ばなくてはならないのではないのでしょうか。自分の思い、自分の知識、あらゆる自分にまわりつくものを捨て去って、主から新しい啓示を受け取る備えを整えなければなりません。もし私たちが主の御前に心を静めるなら、おのずと主の偉大さ、すばらしさを意識させられて、その前に小さくなり、ひれ伏し、心から礼拝せざるを得なくなります。私たちが王の王、主の主に近づけば近づくほど、心からの礼拝をささげずにはおられなくなります。主はそのような人々を捜し求めておられます。

今まで述べてきましたように、このような祈りの生活を送り、祈りの奉仕をなすことが、私たちに現実的にできるのでしょうか。答えは、「出来る」のです。なぜなら父なる神は私たちに御子イエス様と御霊をお与えになられたからです。「主との交わりに入る事ができる」、これは本当にすばらしい特権です。また、何という大きな責任が私たちに課せられていることでしょう。

私は祈ることができないという人もいるかもしれませんが、主はもうすでに備えをしてくださいました。私たちははばからずに、主に近づくことができ、絶えず主のご臨在のうちに住むことが赦されています。主が…

(テープ切れ、B面に)

…出なさいという勧めは、新約聖書の書簡にたくさん見られるところです。主に信頼する霊は、私たちの祈りの生活に欠くべからざるものです。もし私たちの主との交わりが正常な関係になれば、私たちの今の生活はもちろん危なくなってくるのです。

ヘブル書から、一箇所読んでみましょう。

へブル人への手紙 10章の19節から22節

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができるのです。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。また、私たちには、神の家をつかさどる、この偉大な祭司があります。そのようなわけで、私たちは、心に血の注ぎを受けて邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われたのですから、全き信仰をもって、真心から神に近づこうではありませんか。

まことの信頼には次の知識が必要だと思えます。すなわち私たちは、「イエス様によって」主のご臨在のうちに入る特権を与えられています。その「イエス様の御名」によって私たちは天のお父様に近づくことができるのです。私たちが己の名によって主に近づくなら、それは誤りです。私たちはイエス様の御名によって、はばからずに御前に近づくことができるのです。

私たちは、「イエス様によって」天のお父様に近づき、お会いすることができます。私たちのイエス様は、私たちをご自身の尊い血によってきよめられた者として、父なる神に紹介して下さるのです。私たちはひとりぼっちで何もできないまま、み父に近づく必要はありません。イエス様が、ご自身の義をもって、私たちを覆い包み、私たちとともにいまして、み父に導いてくださいます。イエス様こそ、私たちの信頼すべきお方です。

信頼のほかに、もう一つの祈りの要素である「助け」は、聖霊によって用意されています。私たちは確信をもって、はばからずにご臨在に入ることができます。けれど一方、私たちは己の全く望み無き状態を知っています。この弱い私たちを助け、励ましてくださるのは「聖霊」です。

ローマ書の8章。パウロ、また初代教会の兄弟姉妹の告白のようなものでもあります。一つの証しです。

ローマ人への手紙 8章26節、27節

御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいます。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

パウロも含まれています。彼の書いた文章です。私たちは確かに救われています。信じます。けれどたいした者ではありません。弱い者です。弱い私たちを助けてくださるのは、御霊です。

祈りの時、聖霊の助けが無いほどあわれなことはありません。ゲッセマネの園でイエス様が苦しんで祈られた時、弟子たちがほとんど祈り得なかったということは、私たちはよく理解できることです。けれど、私たちは助け主なる聖霊を持っています。聖霊は、私たちのうちに宿ってくださり、私たちの力となり、私たちのうちに働くお方です。御霊は私

たちの弱さを助けて、補ってくださいます。また、何を祈ったらよいか、私たちの無知を補ってくださいます。聖霊のみが、主のみこころを知っておられます。

その聖霊は、私たちが主のみこころにかなった祈りをするために与えられているのです。イエス様ご自身が、私たちの信頼の対象であり、聖霊は私たちの助け主です。ですから、私たちは安心して喜びをもって祈ることができるのです。

どうして祈ることは難しいのでしょうか。

前に言いましたように、悪魔が何とかしてまことの祈りを妨げようと攻撃しているからです。悪魔が私たちの祈りの生活に対して、常に攻撃を加えていることを私たちも絶えず覚える必要があるでしょう。

どの教会もいかなるキリスト者も、このことを告白せざるを得ません。悪魔が私たちを祈らないようにしたならば、悪魔が完全な勝利を得たこととなります。悪魔はこの事からを十分に知っていますので、私たちを絶えず攻撃しているのです。

悪魔はいろいろな攻撃方法を用います。

初めに、私たちのイエス様への信頼に対しての攻撃ではないでしょうか。悪魔は私たちが主に対し、近づくにふさわしくない者であり、また望み無き者であることをささやいてきます。もし私たちがそのささやきに耳を貸すなら、悪魔の大勝利となります。イエス様ご自身が、私たちの信頼の対象であり、聖霊は私たちの助け主であることをしっかり握って祈りましょう。

次に悪魔は、私たちの肉体に対して、また神経に対して、激しい攻撃を加えてきます。悪魔は私たちを過労に陥れ、祈らなくさせてしまいます。この過労は、しばしば私たちの側に原因があります。主イエス様が私たちの信頼の対象であり、またイエス様を喜ぶことは私たちの力です。もし私たちが主にある喜びをもっているならば、肉体の疲れをそんなに感じないはずで

それから、私たちが定めた時を祈りに用いようと計画していても、それが実現できないことが往々にしてあります。これも悪魔の攻撃の一つです。私たちは瞬時でも、み父との交わりを持ち続けることができるのですが、この交わりを断ち切ろうとして悪魔はいつも戦いを挑んできます。もし悪魔がこの戦いに勝利を治めるなら、悪魔は全てを得たことになるのです。

悪魔は私たちをして世界の悩み、苦しみを見る目を眩ませようとします。もし私たちがいつも自分のためにだけ祈るなら、悪魔は大笑いすることでしょう。

イエス様は、「働きは世界である」とよく言われました。私たちは全世界のために祈る責任を持っています。だから私たちは目を覚まして祈らなければいけません。

一つ疑問があります。もしある一人の人が祈り、その答えがなかなか得られないような場合、何か方法があるのでしょうか。そうです。聖書の答えは「教会の祈り」です。自分の祈りだけではなく、兄弟姉妹とともに祈ることです。個人個人の祈りは確かに大切です。けれども、お互いに助け合い、お互いがお互いを必要とし、決して一人であることができ

ません。これは主のみ思いです。私たちはどうしてもお互いを必要としています。特に、祈りにおいてはそうです。

マタイ伝 21 章の 13 節を読むと、次のようなみことばがあります。イエス様の言われたことばです。非常に厳しいみことばです。当時の聖書学者たちに言われたことばです。

マタイの福音書 21 章 13 節

そして彼らに言われた。「『わたしの家は祈りの家と呼ばれる。』と書いてある。それなのに、あなたがたはそれを強盗の巣にしている。」

マタイの福音書 18 章 19 節、20 節

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

そしてヘブル書の著者は、3 章 6 節に、「私たちが神の家なのです」と書いたのです。

イエス様は、ご自身の家、ご自身の教会の真ん中におられます。イエス様はまた、二、三人、ご自身の名によって集まるその真ん中におられます。一人だけで祈っているところ、とは書いていません。もちろん私たちが一人で祈っても主のご臨在はありますが、イエス様はここで、教会がいかに大切であるか、また祈りがいかに大切なものであるかを教えるために、このように言われたのです。

すべてのことを主に話すこと、主に告げることこそが大切です。私たちの生活にとって、どんな些細なことも意味の無いというものはありません。日常生活のどんな小さな事がらをも、私たちは主に告げることが赦されています。ひとりぼっちで悩まなくてもいいのです。

パウロは、ピリピ人への手紙の 4 章の 6 節に次のように書いたのです。

ピリピ人への手紙 4 章 6 節

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。

主は、「求めよ。そうすれば与えられる」と。

ヤコブ書のよく知られている個所なのですが、1 章を読むと次のように書かれています。

ヤコブの手紙 1 章 5 節、6 節

あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

#### 4章2節後半

あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。

と。

もし私たちが主に頼り頼んでいなければ、まことの求めをなすことができません。より頼んで求める者は、必ず主が生きておられることを経験することができます。

マタイの福音書 7章7節、8節

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」

とイエス様は約束してくださいました。

イエス様は働こうと望んでおられ、勝利を与えようと望んでおられますが、そのために必要なことは、祈ることです。

もう一箇所、ちょっと読んでみましょう。使徒行伝の4章の中で、祈りとは結局戦いののだ、と書かれています。どんなに望み無き状態にあっても、戦いの祈りをするときに、十字架の勝利が現わされます。初代教会は祈りのうちに戦って、復活なされたイエス様の勝利を経験しました。

使徒の働き 4章23節から31節

釈放されたふたりは、仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちが彼らに言ったことを残らず報告した。これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。あなたは、聖霊によって、あなたのしもべであり私たちの先祖であるダビデの口を通して、こう言われました。『なぜ異邦人たちは騒ぎ立ち、もろもろの民はむなしいことを計るのか。地の王たちは立ち上がり、指導者たちは、主とキリストに反抗して、一つに組んだ。』事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油を注がれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、あなたの御手とみこころによって、あらかじめお定めになったことを行ないました。主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもべイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

初代教会は、結局、祈る教会でした。祈りの中で戦う教会でした。大切なのは「信仰の祈り」です。この祈りは、主のみこころが何であるかを明確に知ることが前提となっていなければなりません。このような祈り手は、直ちに答えをいただく祈り手です。ペテロはそれを経験したことがあるのです。

使徒の働き 9章40節

ペテロはみなのを外に出し、ひざまずいて祈った。そしてその遺体のほうを向いて、「タビタ。起きなさい。」と言った。すると彼女は目をあけ、ペテロを見て起き上がった。

祈ることこそが大切です。ある祈りも大切でしょう。パウロはそういう祈りを知っていたのです。せっかくイエス様の救いにあずかったのですが、なかなか成長しなかった人々のために彼は書いたのです。よく知られている

ガラテヤ人への手紙 4章19節

私の子どもたちよ。あなたがたのうちにキリストが形造られるまで、私は再びあなたがたのために産みの苦しみをしています。

この祈りは、父の心との交わりを意味しています。

祈りの目的は何でしょうか。「尊き教会」ではないでしょうか。尊き教会とは、御子主イエス様にふさわしく着飾った花嫁、父のみこころにかなう教会です。私たちは尊き教会となるために、集中的に祈らなければいけないのではないのでしょうか。

私たちが、主イエス様が十字架にお架かりになる前の、ヨハネ伝17章とパウロの祈りを考えるときに、この「尊き教会」ということが、いかに大切であるかを知ることができます。祈る時に、この事実を常に心に留めるべきではないのでしょうか。

失われゆくたましいを獲得するというだけでなく、救われた私たちが主イエス様と一つになるということが、本当に大切であり、また、必要なのです。

また、主の持つておられる富と一つになることも大切です。今日もっとも大きな問題と言わなければならないのは、救われた人々を通してイエス様のご栄光が輝き渡ることはないのでしょうか。御霊がこの世にイエス様の富を現わす道具は、結局、主の恵みによって救われた兄弟姉妹を通してのみで、ほかに方法はありません。

これらの事がらをすべてまとめてみますと、主は私たちに、もっともっと内面的な交わりを待っておられるということになります。これが祈りの実です。父は多くの神の子が、御子主イエス様のうちにあつてご臨在のもとにあることを、望んでおられるのです。

父なる神は、大祭司であるイエス様とともに祭司を多くもちたい、ということをお求められます。

祈ると主をよりよく知ることができますし、まことの喜びに満たされるようになります。また、みこころにかなう礼拝者となります。

了